

## 第4章

# 都市形成の経緯と課題

1	都市形成の経緯と今後の課題.....	28
2	中心市街地形成の状況.....	30
3	町民の意向.....	32

# 1

## 都市形成の経緯と今後の課題

県都盛岡市の南側に隣接する本町は、北上盆地の平野部に広がる農地を基盤に、徳田米の産地として名声を得るなど、古くから水田単作地帯として、農業を基幹産業に発展してきました。農業生産基盤についても長い時間をかけて土地改良事業が行われ、優良農地が広がる田園風景が創り出されました。

本町の都市機能は、昭和30年(1955年)の3村合併(徳田村・煙山村・不動村)まで旧村単位でそれぞれ発展してきましたが、明治31年(1898年)の矢幅駅開業により、駅周辺が大正から昭和初期にかけて大ヶ生鉱山の金鉱石、徳田米、矢幅氷などの特産品を運ぶ盛岡近郊の物資集散地として栄えたことが、現在の本町における中心市街地形成の礎となっています。

これらの背景をもとに本町はこれまで、自然環境との調和に配慮しながらまちづくりを進めてきました。

都市化を進める契機となった昭和40年代の企業立地とそれと並行して供給が進んだ宅地の増加により発展し、昭和60年代から平成の初期における公共施設の整備・集積や土地区画整理事業の着手により、都市としての顔づくりが一層進み、それに合わせて人口も着実に増加してきました。

前回、平成16年(2004年)に策定された「矢巾町都市計画マスタープラン」は、公益事業民営化や地方分権化に伴う社会経済の動きのなか、個性あるまちづくりのあり方が求められていることと同時に、都市再生を視点とした都市政策の大きな変革を受けて策定され、このマスタープランに沿って平成18年(2006年)に事業化された矢幅駅周辺土地区画整理事業は完了を迎え、併せて矢幅駅東西自由通路、駅舎橋上化、町活動交流センター「やはばーく」の開設により矢幅駅周辺が、まちの中心市街地として整備されました。

また、県の医療福祉拠点となる岩手医科大学の開校及び同大学附属病院や関連施設の開業、広域交通網の一角を担う矢巾スマートインターチェンジの開通や徳田橋架け替え整備により交流人口の大幅な増加と新たな産業の進出が見込まれており、これらを契機とし、今後のまちづくりに活かすことが必要となります。

一方で日本は少子高齢化と初めての人口減少社会を迎えており、地方都市では大都市圏への人口流出、大都市圏では郊外部の高齢化やスポンジ化(\*<sup>1</sup>)、これまで整備してきたインフラの維持管理費が喫緊の課題となっています。

本町においては、これまで転入による人口増加が続き、少子高齢化の進行は緩やかですが、市街地縁辺や国道4号沿道を中心に町全域に空き家が出始めており、将来的には同じ課題の発生が懸念されるところです。

さらには、こうしたなかで人々の暮らしや価値観は多様化し、地方分権の波が一層高まる

\*<sup>1</sup> 空き家・空き地が数多く発生し、多数の穴があるスポンジのように都市密度が低下すること。サービス産業の低下や行政サービスの非効率化、コミュニティの存在危機を招き、まちの衰退が懸念される。

など、各自治体にはまちづくりの方向性をより明確に示すことが求められています。

これらの時代環境や社会情勢の大きな変化に対応するために本町では、平成 28 年度(2016 年度)を初年度とし、平成 35 年度(2023 年度)を目標年度とする第 7 次矢巾町総合計画基本構想を策定し、次の 3 つを柱として取り組むこととしています。

- ▶ 今後の発展を着実なものとする「まち」づくりの推進
- ▶ まちの発展を支える「ひと」づくりの推進
- ▶ 持続可能なまちづくりを可能とする「しごと」づくりの推進

都市計画制度では人口減少社会などの課題に対応するため、「コンパクト」と「ネットワーク」を掲げて関係する制度の改正を行っています。

本町ではもともとコンパクトなまちづくりを進めてきたところですが、さらに多機能性を併せ持った魅力的なまちづくりを進めるため、都市計画マスタープランの改定にあたっては第 7 次矢巾町総合計画基本構想の 3 つの柱を課題と捉え、次の視点により見直しを行います。

- (1) 盛岡広域都市計画区域マスタープランや矢巾町総合計画等の上位計画における本町都市計画の位置づけを明らかにするとともに整合を図ります。
- (2) 関連計画について都市計画の観点から必要な計画や取り組みを都市計画マスタープランに反映させます。
- (3) 少子高齢化、人口減少、環境問題等の社会情勢に基づく課題について、都市計画の観点からの取り組みを明らかにします。
- (4) 町民や関係機関の意見等をもとに本町を取り巻く状況を勘案し、計画・事業等の見直しを行うとともに、新たな計画・事業等を明らかにし、20 年後のまちづくりを見据えて見直します。

## 2

## 中心市街地形成の状況

中心市街地の形成の過程です。生活サービス施設を内側にして住宅地が整備され、それを田園風景が取り囲むコンパクトな市街地を形成しています。

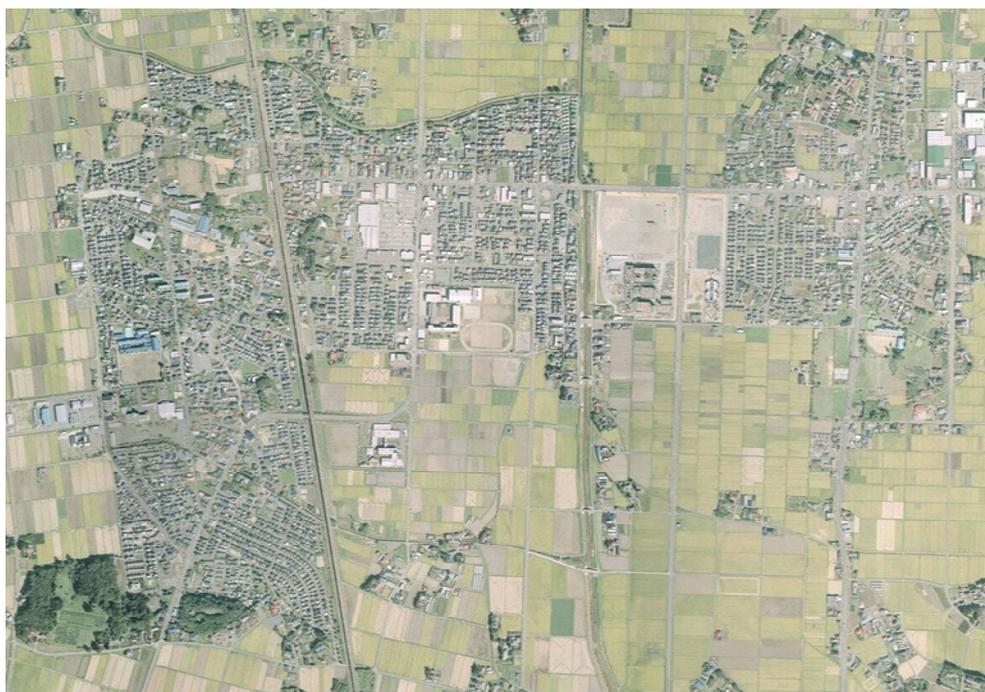
平成元年（1989年）



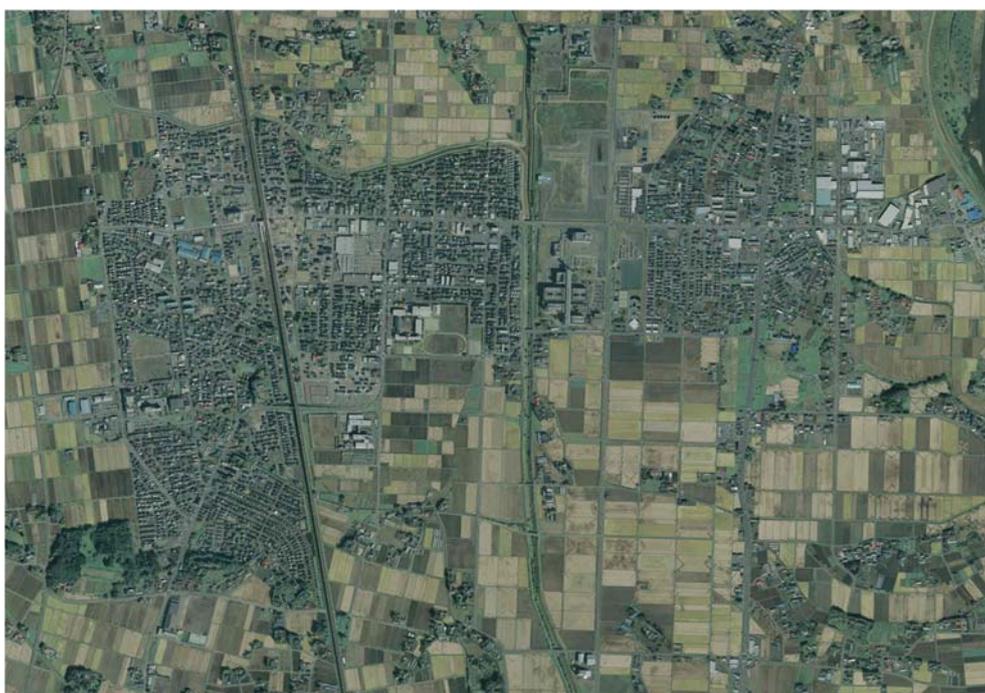
平成11年（1999年）



平成18年(2006年)



平成27年(2015年)



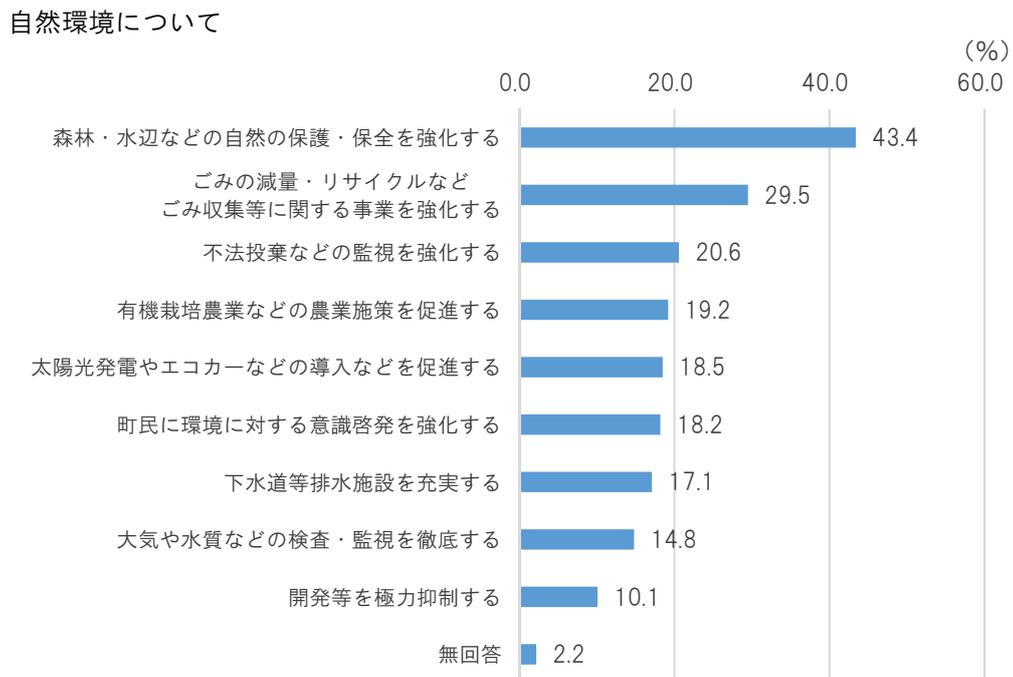
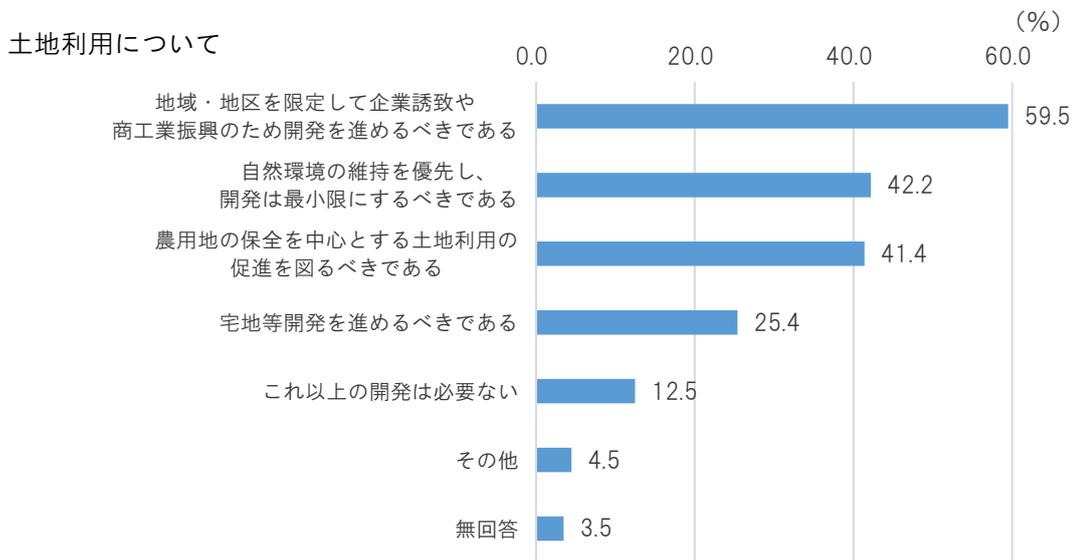
### 3

## 町民の意向

### アンケート調査結果

#### (1) 土地利用について

土地利用に関しては企業誘致や商工業振興のためには開発を進めるべきであるとする回答が最も多く、次いで自然環境や農用地の保全を考えるべきという回答がほぼ同等になっています。また、自然環境に関しては、森林・水辺などの自然環境の保全と地域生活環境に対する関心が大きいという結果になっています。



資料：第7次矢巾町総合計画基本構想 住民アンケート調査  
(平成26年(2014年)実施)

## (2) 本町の評価

住みたい理由と住みたくない理由が重複していますが、住民は買い物や交通など日常生活の便利さを求めています。

また、本町の自然環境が評価されています。

住みたい理由



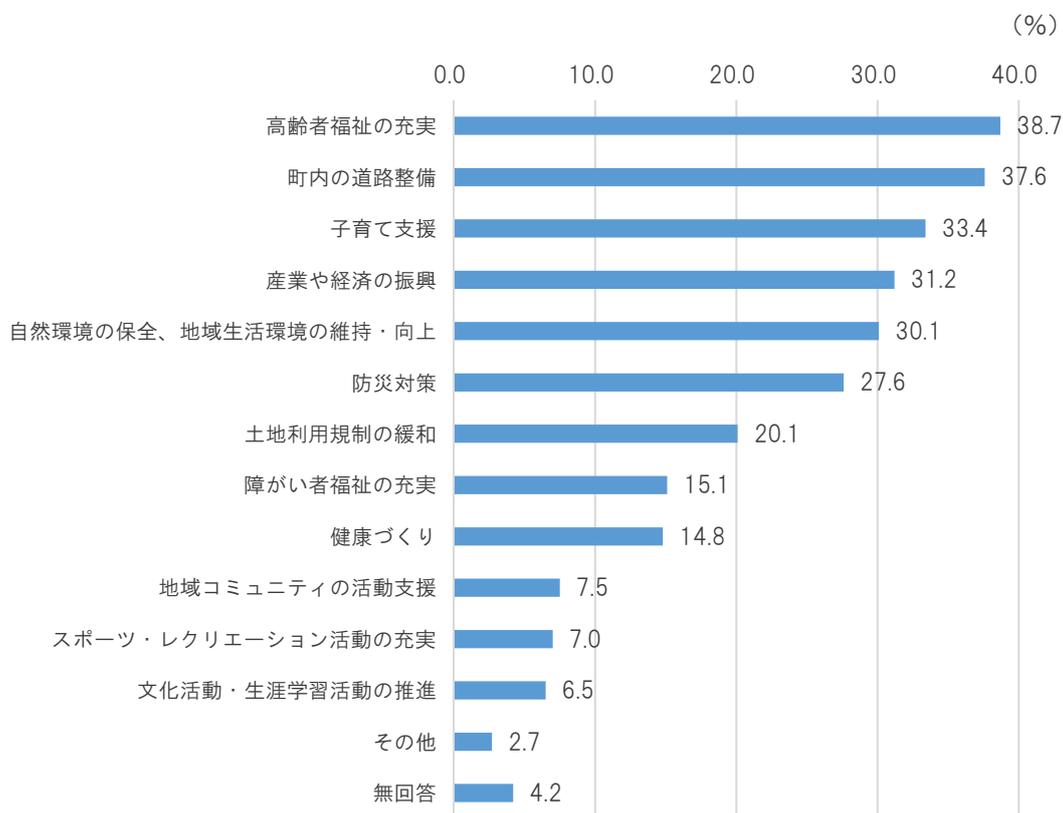
住みたくない理由



資料：第7次矢巾町総合計画基本構想 住民アンケート調査  
(平成26年(2014年)実施)

### (3) 今後行政に優先的に取り組んでもらいたいこと

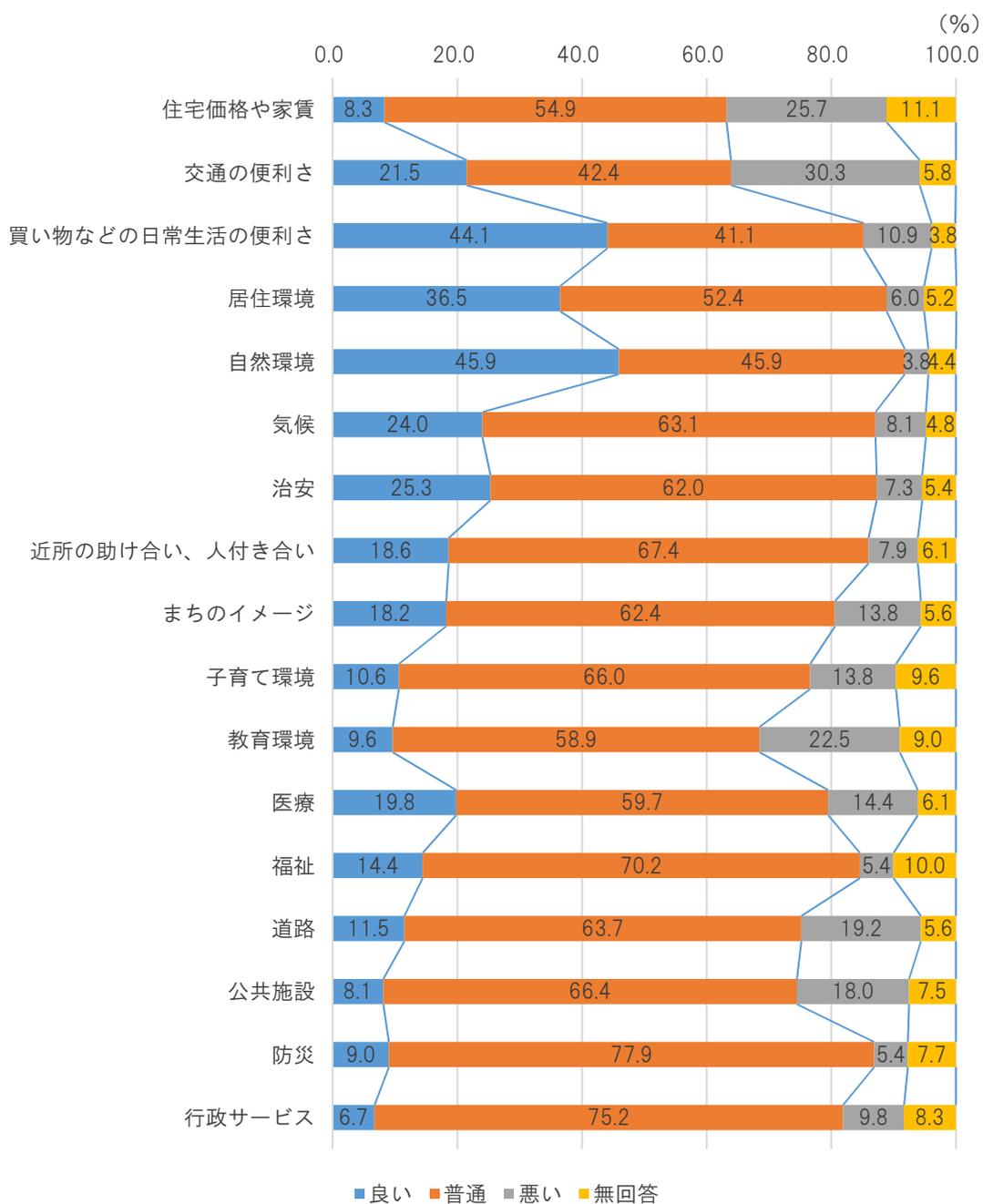
生活に直結する高齢者福祉の充実、道路整備、子育て支援が上位を占めています。次に、産業や経済の振興、自然環境の保全・地域生活環境の維持・向上、防災対策、土地利用規制の緩和などのまちづくり環境に関することが20%を超えています。



資料：第7次矢巾町総合計画基本構想 住民アンケート調査  
(平成26年(2014年)実施)

(4) 本町の住環境に対する町民の評価

本町の住みやすさに対する評価は、市街地としてのまとまりと自然環境とのバランスの良さであることが表れています。



資料：矢巾町まち・ひと・しごと創生総合戦略 住民アンケート調査  
 (平成27年(2015年)実施)

